
ヤンデレ西園様の
性奴隷教育
名門貴族のお嬢様が買い取られた先は幼馴染の家でした
挿絵 10枚
文字数 37,000字
聖華快楽書店

奴隷になった幼馴染のヤンデレお嬢様に私を買い取ったのはでした



著者 mki バーガー
原案 エルトリア
イラスト Dermar
タケシス

SEIKA 聖華文庫



ノルン・フィーゼル

ニーナ・キャベンディッシュ



第一話　買い取り先は幼馴染

「……ハイ、ありがとうございまス～！　買い上げいただいた『商品』は後ほど購入者様の元へとお届けにあがりまス。さて、当オークションもそろそろ終盤！　張り切って参りましょウ！！」

布越しに聞こえる呂律の怪しいアナウンスによって、暗闇の中を彷徨っていた私の意識が引き上げられた。およそ2メートル四方の箱に覆い被せられた厚布は外部から中身を隠すための代物であり、当然こちらからも外の様子は窺えない。それでも、漂ってくる不快な臭気だけでここが碌でもない場所である事は容易に察しがついた。

（……っ、よりによって『商品』呼ばわりだなんて。今更取り繕うこともないでしょうに）

おそらく薬か何かを盛られたのだろう。朧げな記憶の中で自分を取り囲む男たちが口にしていたものと同じ単語が聞こえてきて、二十年の人生の中で最も杜撰な扱いに文句の一つでも言いたくなるけれど、口を突いて出るのはくぐもった唸り声だけ。こじ開けられた口内に残る球に開けられた幾つもの穴からひゅーひゅーと掠れた音が鳴り、舌の上でゴム特有の奇妙な味が広がる。開きっぱなしの口端からだらだらと涎が溢れるのを止めようにも、頭上から伸びる手錠に繋がれた両腕は一向に下ろせない。

幕の向こうでは続々と値段の応酬が繰り広げられている。数万、十数万と跳ね上がっていく額を耳にしても、ほんの数日前までなら眉一つ動かさなかったかもしれない。しかし今は文字通りの無一文……今身につけている物だって、胸元と腰回りを申し訳程度に隠せるほどの面積しかない、服と呼ぶにはあまりにも粗末なボロ切れでしかないのだから。

『さあ、次が今回のオークションの目玉にして今をときめく最高級のお宝……＝あの＝フィーゼル家のご令嬢、ノルン・フィーゼル様でございまス！！』

「ふ？　――――ッ！？！？」

物思いに耽っていた時間は思いのほか長かったらしい。少々不意打ち気味に名前を呼ばれて顔を上げた瞬間、引き下ろされた幕の向こうからの光に思わず顔を背けてしまう。しかしそれも一瞬のことで、眩さに慣れた瞼を上げた私の目に飛び込んできたのは――半円状のホールに腰掛ける大量の人間と、その顔面に張り付く巨大な蝶だった。

「……ッ！？　～～～～～～！！！？！？」

『ご覧のように未来のご主人様たちに会えて大変喜んでおりまス！　なんと言ってもフィーゼル家といえば新聞の一面を飾った没落事件。際限なく続くと思われた事業の拡大に失敗し、敢えなくお家取り潰しとなったあの元・名門貴族の一人娘が！　父親の抱え込んだ莫大な負債を少しでも埋めようと文字通りその身を捧げているのでス！！　……アァッ！　なんとも涙ぐましいではないですカ！」

わざとらしい演技と口調に司会の男を睨みつけるが、そんな些細な抵抗など全く気付く様子もない。それよりも目についたのは、彼の背後に並べられた空っぽの檻だ。大人一人が余裕で入るほどの大きさのそれの天井からは半ばで切られた縄がぶら下がっていて、もしかしなくても今自分が入れられているのと同じ類の物だと分かる。そしてその中身がどうなったのかも、現在進行形で浴びせられる下卑た視線が物語っていた。

――――おい、アレ本物かよ。

――――間違いない、社交場で見たことがある。例の〝姫様〟だぜ。

――――アイツの家のせいでウチは大損食らったんだ！何としてでも手に入れて、たっぷりお礼をさせてもらわないとな……

塞ぐもののない耳に届く呟き。その内容と身なりを見る限り、ここに居るのは全員それなりの地位と権威を持つ者ばかりなのだろう。落ち着いた頭でもう一度目を向ければ、顔に張り付いているのは蝶などではなく素性を隠すための仮面だと分かった。

おそらく父の事業に巻き込まれたどこぞの貴族のお偉方なのだろうけれど、それを娘の私に八つ当たりした所でどうにもならないと何故理解できないのか。いつもならそう切り捨てるのだけれど、今の自分がそう出来る立場にない事も、それを実行できるほどの余力が無いこともイヤというほど痛感させられている。つい先日まで当たり前に機能していた〝皇国有数の貴族と謳われたフィーゼル家の一人娘〟という肩書きはこの場において何の意

味も無く、身内の借金の方に売り飛ばされた一人の『奴隷』でしかないのだから。

「さぁ皆様、泣いても笑ってもこれが本日最後の『商品』ですヨ！　愛玩用に側に置くのも良し、従者としてこき使うも良し、勿論〝お楽しみ〟の相手に使うのも良し！　別にコレの所有者になったからと言って借金の片棒を背負い込む心配は要りませんので、どうぞ日頃の緊張とお財布の紐を緩めていただきますようお願い申し上げまス！」

オークションの開始を告げる木槌の音。途端に耳を塞ぎたくなるような喧騒がホールに充満し、続々と値段が釣り上がっていく。狂気に取り憑かれたような怒声にも似た声が反響し、舞踏会でも度々向けられていた値踏みするような目線がさらに遠慮のない下品さを以て絡みついてくる。目を逸らしても、顔を背けても、自分を見下す瞳、瞳、瞳……鳥籠に捕らえられた哀れな見せ物として微かに身体を揺することしか出来ない私を余所に、会場を包む熱気はさらに勢いを増していた。

「……サァ、現在の値段は６５万に届く所でしょうカ。奴隷――失礼しました、ウチで扱う『商品』としては新記録の額となるでしょウ！　これ以上名乗りを上げるお客様がいらっしゃらないようであれば、コレで落札とさせていただきますがよろしいですカ？」

司会の声が聞こえる程度には喧騒が止み、唸り声、或いは溜息のような音があちこちから聴こえてくる。当然といえば当然だろう。たかが奴隷一人……しかも家事や力仕事に無

縁な人生を送ってきた箱入り娘に掛けられる値はとうに超えている。労働力目当てで無いのなら、残された道の先にあるのは〝肉体的な死〟か〝社会的な死〟か――――

――――ザワッ……

（……？）

数秒後に訪れるであろう絶望的な未来に思いを巡らせていた私は、いつの間にか会場内の空気が変わっていることにすぐに気付けなかった。再び巻き起こった喧騒にはそれまでにない困惑の色が滲んでおり、呆気に取られていた司会が汗を拭きながらアナウンスを再開した。

「出ましタ～！！　ひゃ、百万！　百万でス！！　これに上乗せする方はおいででしょうカ！？」

「ひゃふっ……！？」

猿轡をかまされているのを忘れて思わず聞き返してしまった。文字通り桁違いの額を提示した人物に全員の視線が注目するが、ステージ上からは逆光にあたる位置にいるためか顔までは伺えない。それでも、その人物に挑む者がいないことは、先程以上の静寂に包まれた場内の雰囲気が雄弁に物語っていた。

「それでは、こちらの『商品』のお取引はこれにて締め切らせていただきまス！　購入されたお客様におかれましては、ステージ上にお上がりくださいませ！　他のお客様も、また次回お会いいたしましょウ～！」

購入を断念した富豪たちがスタッフの案内のもと続々と退出する中、こちらに歩いてくる人影が一つ。この辺りでは珍しい東洋風のドレスに身を包んだ人物の顔には蒼色の猫をあしらった仮面が貼り付いていて、じっとこちらを見つめてくる。

大枚をはたいてまで購入を決めたのはどんな奇特な人物かと睨み返したところで、キュッと結ばれていた謎の人物の口端が持ち上がった。

「……良かったぁ。やっぱり本物のノルンちゃんだぁ」

そう呟いた女性が顔を覆っていた仮面を外した。他の客が既に退出しているとはいえ、このような場で素顔を晒すなんて愚の骨頂というほかない。それでも、それを指摘するにはあまりにも見覚えのある顔、そして聞き覚えのある声に、私は呆然とその名を呟いた。

「……ニー、ナ……？」

§

初めて出会ったのは十数年前。父がまだ新たな権益の獲得に着手し始めた頃、同じ事業に携わる新興貴族との顔合わせの時だった。

「ノルンちゃん、すごいねぇ。ニーナの知らないこと、なんでも教えてくれるんだもん～」

キャベンディッシュ家、と言う名に聞き覚えはなかったけれど、東洋諸国との貿易で名を上げた一族が金で爵位を買い取ったのだと聞かされて大いに納得した。髪色からしておそらく父親の血が濃いのだろう、やや癖のある黒髪を肩口で揺らす少女――ニーナが緊張感のカケラもない顔で微笑みかけてくる。

悩みなど縁もゆかりも無さそうなのほほんとした口調に、幼子みたいに締まりのない笑顔。文字通りのんびりと育ってきたことが一目見て分かるその姿は自分の中の『貴族』のイメージとあまりにもかけ離れていて、思わず頭を抱えてしまう。

「あなたが何も知らなさすぎるんでしょ……。いいこと？　あなたみたいな成り上がりでも貴族であることは変わらないの。力ある者としての誇りをもって、弱い者を導くのが高貴な者の責務――それなのに、最低限の知識さえ持ち合わせていないなんて、同じ貴族として恥ずかしいわ」

「コウ……セキム……ノルンちゃん、むずかしい言葉もたくさん知ってるんだねえ」

物心ついた時から教え込まれてきた理念もまるで通じないことに頭痛が酷くなる。これが庶民相手ならここまで相手にすることはないけれど、成り上がりとはいえ相手も貴族、立場が同じであるならば無下に扱うわけにもいかない。

……あるいは同じ立場だからこそ、代々皇国を支えてきたフィーゼル家の者として恥じぬよう様々な教育を受けていた私にとって、彼女の態度は怠惰としか思えなかった。

それからというもの、幾度も顔を合わせるたびにあれこれと付いて回ってくる彼女と共に過ごすことが多くなった。こちらの機嫌を伺い、どうにかして懐に入ろうとする輩に隙を見せないよう壁を作っていた私にとって、気が付けば傍にいるのに人畜無害なニーナとの関係は何ともむず痒く、しかし決して不快なものではなかった。

『違うわ。ティーカップは取っ手を抓んで……その両手持ち、絶対外でやっちゃダメよ』

『この茶葉を使ってどうしてこんな渋い紅茶ができるの？　やり方は教えたんだから、もう一度淹れ直してきなさい』

『今日は勉強しないといけないって昨日伝えてたわよね？　……ああもう、分かったわよ！　その代わり、アタシの手伝いをすること！　手始めに、この紙に書いてある題名の本を探してきなさい。後ろの本棚のどこかにはあるはずだから……ほら、さっさとなさい！』

周囲の大人は妹が出来たようだと言っていたようだけど、どちらかというと主に構ってもらおうと寄ってくるワンコとか、三歩後ろを歩く家来とかの方が近かったのだと思う。何でも素直に言うことを聞くし、多少無茶なお願いでも『貴族としての嗜みだから』と言いくるめれば疑いもせず実行するのが楽しくて、結局父の計画が次の段階に進むまでは毎日のように顔を合わせていた。それからは私に課せられる勉強や稽古の量がさらに増してきて、徐々に疎遠になってしまったのだけれど……

S

「良かったぁ……他の人に買われてたりしたらどうしようかと思ってたよぉ」

オークション会場から場所を移し、引き渡し用と思しき殺風景な個室に運ばれた私を出迎えた女性。記憶の中の姿よりも色々と成長しているのは当然といえば当然なのだけれど、クセの強い黒髪やのんびりした喋り方はまるで変わっていない。

もっとも、長年疎遠になっていた昔馴染みとの思いがけない再会を喜ぶにはあまりにも状況が特殊すぎて、変わらず檻に繋がれたままの私は呆然とその顔を見つめ返すことしか出来なかった。その反応が予想外だったのか、檻を隔てた向こうに腰掛ける彼女――ニーナの表情が次第に曇っていく。

「……あれ～？　ノルンちゃん、ニーナのこと忘れちゃった？　そりゃあ、ずーっと会えてなかったけど……」

「――あ、いや、こんな所で会うなんて思ってもみなかったからビックリし……って　そうじゃなくて！　どうして貴女がここに居るの！？　しかもあんな大金まで……！」

マイペースで、ボーッとしていて、放っておいたら悪い大人に騙されても気付かなさそうな子だった。そんな彼女と奴隷市場という場所が結びつかなくて、混乱はさらに深まるばかり。そんなこちらの心情も露知らず、当の本人はほっと胸を撫で下ろしながらこちらに歩み寄ってくる。

「どうして、って……ノルンちゃんを助けにきたんだよぅ」

紅の瞳を潤ませながらそう口にした彼女の声に篭っていた熱。昔のままの朗らかな笑みを浮かべてさも当然のように語られた言葉の衝撃が強すぎて、そこに込められた真意には思い至らなかった。

「あのね、ノルンちゃんのお家のことを知らせてくれたのはお父さんなの～。でもお屋敷の人たちだけじゃなくてノルンちゃんもどこかに連れていかれたって聞いたから、いてもたってもいられなくって……色々調べてもらったらここに居るって分かったから、無理言

って入らせてもらったんだぁ。ちょっとだけ怖かったけど、大好きなノルンちゃんが遠いところに行っちゃうことに比べたら、平気へっちゃらだったよぉ」

えっへん、とたわわに実った胸を張ってみせるニーナの姿に、先程とは違う意味で言葉が出なかった。何年も前にろくな別れの言葉を交わすこともなく関係が消えてしまったと思っていた幼馴染が、私を助けるためにこんな所までやって来てくれた。驚きと安堵、それ以上の感謝の念で頭がいっぱいになって、無意識の内に張り詰めていた緊張の糸がプツリと切れた音がした。思わず涙がこぼれてしまうが、縛られたままの両腕ではそれを拭うこともできない。

「泣かないで、ノルンちゃん。待ってて、檻の鍵は商人さんが――――」

「……いやァ、お待たせして申し訳ありませン！　ご注文の品がご用意できましたのデ、最後の仕上げをさせていただきまス！」

「――はぁい、ありがとう～。ノルンちゃん、もうすぐ出してもらえるから、そのままジッとしててねぇ」

背後から聞こえる陽気な声の持ち主はおそらく司会を務めていた奴隷商だろう。数秒の格闘の末にようやく鍵を開けた彼の手が拘束の結び目を解いていくのを見て、ようやくこの地獄のような場所から解放されるのだという実感が湧いてくる。

「あ、ねぇノルンちゃん。ちょっとこっち見てくれる～？」
「？　……どうかし――――」

――――カチリ――――

微かな、しかしはっきりと聴こえた異音。檻の外からこちらを呼ぶニーナの方へ顔を向けた瞬間、ナニカが背後から右脚に押し付けられた。そのことに驚く間も無く、完全に拘束から解放された両腕が重力に従って垂れ下がり、引っ張られるように床にへたり込んでしまう。

「基本的な設定は先ほど説明した通りでス。ただ、装着個体にもよりますが馴染むまでにはいくらか時間が掛かるかト……」
「ありがとうございますぅ。でも、せっかく時間が掛かるならもう少し楽しませてもらいたいですねぇ。何処か別のお部屋……ベッドがあるお部屋とかお借りできますかぁ？」

頭上で行われるやりとりにも何の反応も示せない。顔を上げようにも、手足に力を込めようにも、そう命じた思考が瞬く間に解けてしまうような感覚。そんな最中に自分りながら、呼吸はいつも通り緩やかに行われている事が事態の異常性を如実に表していた。

（……なに、これ……何で、動けないの……）

「――――お待たせぇ、ノルンちゃん。お屋敷に帰る前に奥の部屋で休憩させてもらえるみたいだから、少しだけゆっくりしていこ～。じゃあ早速、【私の後ろに付いてきて】ねぇ」

投げかけられたその言葉。それが脳裏に届いたと認識した頃には、いつの間にか私の体はその場に立ち上がっていた。傍らを通り抜けるニーナに引き寄せられるように動いた足がふらふらと歩き出し、恭しく頭を下げる奴隷商を横目に檻を出た私はそのまま彼女の背を追っていく。自分の意思などまるで介在しない、まるで体の関節についた糸が操り人形のように無理矢理体を動かすかのような不思議な感覚。立て続けに起こる変化を捌き切れずにいる私が案内されたのは、一人分のベッドが備え付けられたスタッフの休憩用と思しき部屋だった。

「……なに……？　何なの、これ……？」

「大丈夫大丈夫～、ちょっとしたテストだよぉ。ここなら誰にも邪魔されないから……とりあえず【キスしよっか】ぁ♪」

邪魔が入らないようしっかり施錠したニーナは、思わず見惚れるほど滑らかな動きで身を寄せるとそのままこちらの返事を待つことなく唇を重ねた。

突然の事に身を固くする私を逃すまいと、背中に回された腕が優しく締めつけてくる。文字通り眼前に迫った紅の瞳が悪戯っぽく細められて、唇から伝わる熱が思考を灼いていく。

しかし、いつまでも動揺しているわけにはいかない。いくら幼馴染相手とはいえ過剰が過ぎるスキンシップを注意すべく、一旦身を離すために肩口に両腕を添え――

「……ン……ちゅ、ぢゅる……ちゅうぅぅ……っ」

――そのまま背面に滑らせた両腕で彼女を抱き寄せ、より深い口づけを落としていた。直前までの意思とは真逆の行為を実行してしまっている事は認識できていても、頭の中は『キスをしなければならない』という考えで埋め尽くされてどうにもならなかった。

「――ふ、んっ……ノル、ンちゃん……もっ……と……んぶぅっ！」

唾液と吐息を交換し合う隙間を縫って告げられた声が脳裏に絡みつき、接吻の激しさが更に跳ね上がる。何かに取り憑かれたかのように無心で求め合った私たちがようやく解放された頃には、二人とも息絶え絶えといった様子だった。



「……はっ……はぁ……！　ノルンちゃん……ノルンちゃんとのキス……ホントに出来ちゃった……えへへ、なんだか夢みたいだよぅ……」
「……ぁ……ハァ……ハァ……けほ、ケホッ……！」

うっとりとした顔で佇むニーナと裏腹に、私はまだ咳き込む事しかできない。今しがたの行為が現実である事は、口の中に残るニーナの舌と唇からもたらされた柑橘系の香りが示している通りだ。問題は、先程から言うことを聞かなくなる自分の体の方で――――――

「……何、これ……」

――――たまたま目に入った姿見に映る自分の姿に、今日何度目かの疑問が口を突いて出る。しかし今回のソレは今までとは違い、目の前の光景を受け入れたくないという願望が多分に含まれた呟きだった。

檻から出される直前に聴こえた異音の出所……己の右脚に取り付けられた金色の輪。剥き出しになった太腿に食い込むように取り付けられ、照明を反射して妖しく光るソレの正体が単なるアクセサリーでない事を、私はこれまでの人生の中で教え込まれてきた。

「……『服従の輪』……何でこんなのが私に……！？」

『服従の輪』。奴隷として生きることしか許されない者がその証として身に付ける事を強いられる魔道具の一種。一度主従登録が完了すると、奴隷は主の命令に絶対に逆らえなくなり、危害を加える事もできなくなる。それを付けた者が貴族の事業での労働の一部を担っている事は度々教えられていた。

それを今、他でもない自分が身に付けている。息を荒げていたことも忘れて硬直する私の背に柔らかいものが押し当てられ、耳元で熱い吐息と共に艶やかな声が紡がれる。

「――――？　どうしてって言われても……奴隷を買ったんだから服従の輪を付けるのは当然だよねぇ？」

私を買い取った『主』が鏡越しにこちらを見つめながら、両腕を回して胸を揉みしだいてくる。何を当たり前のことをとでも言いたげな顔の彼女に何か言い返そうとしたけれど、『【とりあえず静かにして】、【ベッドに大の字になって】ねぇ』と命じられた時点で容易く身体の主導権が奪われてしまった。

導かれるようにベッドに歩み寄った私が仰向けに倒れ込むと、隙だらけの私の身体に覆い被さったニーナが再び唇を重ねてくる。しかしそれは一瞬のことで、すぐに狙いが唇から頬、首元へと移動していき、キスマークを付けられるよりも身体中を這う舌先からの刺

激の方に敏感に反応させられてしまう。

「……ふぅ～～……♡　ん、っ……ゃ、ぁ……♡」

今のニーナの顔は私の脇に埋められており、よほどそこが気に入ったのか、緊張と快感に滲む汗を味わおうとするかのように執拗に舐め回してくる。手持ち無沙汰な腕は胸元に回され、双丘を覆うボロ切れの内側に忍び込ませた指で柔らかさを堪能すべく一心不乱に揉みしだく。

そこかしこからもたらされる快楽にも声が漏れないように唇を固く結び、それでも出てしまう音は最低限のボリュームに留める。しかしそれが出来ているのも彼女からの【静かにする】という命令があってのものであり、根本的に快楽を跳ね除けられているわけではなかった。

「……っ……ッ、ッッ！……～～～～～～～っ♡♡♡」

それまで膨らみに指を沈ませているだけだった指が胸元の頂点に位置する突起に狙いを定め、爪先でピンッと弾いた。こちらを包み込むような愛撫から一転してもたらされた強烈な刺激に心の準備ができていなかった私の身体に絶頂電流が駆け巡り、堪え切れなかった声がか細く響き渡る。そのきっかけを作った張本人が目の前の反応を見逃すはずもなく、

顔を上げたニーナは口端を妖しく持ち上げながらこちらを覗き込んできた。

「……」

イッたばかりの私の顔を満足げに見下ろしたニーナは、何を言うでもなくその身を離していく。今度は何をされるのかと動けない身体で身構える私だったが、そんなささやかな決意は下半身から突き上げられた一撃によって容易に打ち砕かれてしまった。

「……ちゅぅ……ちゅる、ちゅぷ……ノルンちゃんのアソコ、とってもツルツルで綺麗なんだけど、お汁がちょっぴり溢れてきちゃってるねぇ……勿体無いから、ニーナが全部舐めてあげる……じゅるるるぅっ！」

その目に映るのは見慣れない天井だけ。その光景が、度々視界を覆う閃光によって寸断されていく。家族や友人は勿論、使用人にさえ見せたことのない禁断の場所……数少ないコンプレックスである毛の薄い秘所を舌で好き放題に嬲られる。それが俗に『クンニ』と呼ばれる行為であることは街の本屋からこっそり仕入れた官能小説から知識として知ってはいたが、実際に経験するのは当然これが初めてだった。普段触れられることのない場所を這い回る軟体の感触に悶える私を逃すまいと、より深く顔を埋めたニーナの舌愛撫が襲いかかってくる。陰唇に吹きかけられる吐息さえ官能を高めるスイッチにしかならなくて、未知の快感に悶える私は自分の口が酸素を求めてパクパクと力なく開閉している事にも、

股間から唇を離したニーナが淫靡な笑みを浮かべている事にも気付けなかった。

「ちゅぅ……えへぇ♡　ニーナ、もっと欲しくなっちゃった……。　だからぁ――――

【思いっきりイッて】♪」

ドロドロに蕩けた思考に溶け込む、淫蕩にまみれた『おねだり』。それは服従の輪を通して絶対的な『命令』となり、ノルン・フィーゼルという人間の中での絶体的な『常識』に変換される。その最後の一押しとなったのは、仕込みを終えたニーナが舌先で陰核を押しつぶすといういささか乱暴な一撃だった。

――――ゾクンッ……！！！

その瞬間、世界からあらゆる要素が掻き消えた。色も、匂いも、音も――――全てのものが白く染め上げられた空間に放り込まれたような感覚が全身を包み込み、処理しきれない情報の濁流に意識ごと押し流されてしまう。

「――――――――――――――――――――――――――――――――！～～～～～～～～～ッ♡～～～～～～～～～～～～～～～！？！？！？♡♡♡♡♡」

最初に戻ってきたのは聴覚。決して広いとはいえない空間にこだまする甲高い嬌声が自

分の喉から零れ出たものだと理解したのは、それから数秒遅れての事だった。

ガクッ！　ガクンッ！　と腰が波打ち、生温かな湿り気と脱力感に見舞われた。室内に充満する性臭の源泉であるそこから噴き出す潮が、押し付けられる口内に注がれていく。勢いに耐え切れずえづいているのが音として伝わってくるけれど、絶頂を強制された身体は放出されるはずの快楽を何度でも味合わせてきて、その度に浮かせた腰から勢いよく温水を溢れさせてしまう。

「――――エ――――――――――あ――――――――――ァあ――――――――――」

絶頂と覚醒を何度繰り返したかもわからなくなってきた頃、先に白旗を上げたのは私の精神の方だった。もはや当初ほどの勢いもなく、入り口を緩ませた股間を細かく上下させるだけの装置となった下半身を見せつけながら意識を手放しかけた私の視界に滑り込んでくる少女の顔。

私の放出した愛液を口だけでなく顔全体で受け止め、艶かしくコーティングされたニーナの唇が言葉を紡ぐ。

――――これから仲良くしようね、ノルンちゃん。

淫熱に浮かされた邪な笑みを浮かべた彼女の顔が、輪郭ごと徐々に薄れていく。意識を途切れさせる直前まで記憶の中にこびり付いていたのは、弓形に曲げられた瞳から覗く妖しげな紅の輝きだった。

第二話　性奴隷となった私

朝日に照らされた街並みを映す窓のそばを通り抜けながら、あまり見覚えのない東洋風の装飾が混じった廊下を進んでいく。キャベンディッシュ家の領地は各所との貿易の拠点として有名だと耳にしていたものの、その中心に立つ屋敷からは朝早くから忙しそうに荷を運ぶ人々の姿や掛け声がよく分かって、その噂が本当なのだと実感させられる。

もっとも、今の私にその光景をゆっくり眺めていられる余裕なんてないのだけれど。

「……っ……やっと着いた……。ほんとにここ、よね……？」

手元の鍵に刻まれたものと同じ紋様が描かれた扉の前で、無意識の内に安堵の声が漏れる。歩いた距離だけなら大したことはないはずなのにこれほどまでに疲労感が蓄積しているのを自覚しながら、その要因である自分の格好に改めて目を向けた。

昨日まで身に付けさせられていたボロ布とは比べ物にならない肌触りの良い素材。素人目にも高級な代物だと分かるソレはほんの少し窮屈で、背中に結ばれた紐によって素肌に押し付けられた薄布からは紅く色付いた谷間が覗いている。ボディラインどころか丸みを帯びた胸の先端で存在を主張する突起まで丸見えになってしまっていることに気付いていながらも、両腕は下半身の前後を隠すので精一杯だ。

（〜〜〜っ、なんでこんな服しかないのよ！？　こんなのほとんど裸と変わらないじゃない！）

こみ上げる羞恥心に唇を噛みながら鍵と一緒に持った紙片を握りしめ、数分前の自分の軽率な行動を悔やんだ。

見慣れない部屋で目を覚ました私がすぐに見つけられるよう枕元に置かれていた一通の手紙。丁寧に折り畳まれたそれをめくってみれば、書いた人の人柄を表すかのような丸っこい字が並んでいる。そこには、気を失っている間にキャベンディッシュ家の屋敷に運ばれたこと、未だ世間の注目の的であるフィーゼル家の娘のノルンを外に出すわけにはいかないこと、屋敷に置くにせよ『顔と名前のよく似た使用人』として扱うよう父から言われたこと等が事細かに書かれていた。

「詳しい事は起きてから説明するから、朝になったら私を起こしてほしいな。服はタンスの中に入れておくから、忘れずに着替えてきてね。　ニーナ」

彼女の声が頭の中で再生されきった瞬間訪れた、脳内で何かが切り替わる感覚。為すべき【命令】を認識した身体が意識を置き去りにして、ベッドを抜け出し一直線にタンスへと向かう。初めて訪れた部屋なのにまるで何度も使ったことがあるかのようにスムーズな

動作で両開きの扉を開けた私の目に飛び込んできたのは、この屋敷の簡単な見取り図とニーナの部屋の鍵、そしてたった今身に付けている『衣装』だった。

（うぅ、スースーする。せめて下に何か履きたいのに……こんなの誰かに見られたりしたら……）

エプロンじみた服はかろうじて身体の前方を隠すだけで、少しでも風が吹けば股間は丸見え。そうでなくとも背中やお尻は完全に無防備で、ただ廊下を歩くだけでも足取りはおぼつかなくなっている。不安と緊張でじっとりと汗ばむ太腿には、使用人という肩書きが完全に建前であることを示すかのように服従の輪（どれいのしるし）が妖しく輝いていた。

そうこうしている間にも誰かがここを通るかもしれない。思考の海に沈みかけていた意識をかき集め、用意された鍵で部屋に入る。書きかけの書類や積み上げられた本、実験器具のようなものが並べられた室内で、目的の人物はベッドに丸まっていた。

「……えへへへぇ……ノルンちゃん……だぁいすきだよぉ……♪」

ご丁寧にこちらに顔を向け、心底幸せそうな表情で夢の世界の住人になっている黒髪の少女。締まりのない口元と蕩けそうな声音の寝言に毒気を抜かれながら、大人になっても変わらない幼馴染の肩を揺する。

「ニーナ、起きて頂戴。もう朝よ……って、布団にくるまらないの！　貴女が起こすように言ったんでしょう！？　もう……いいから早く起きな、さ……！？」

どうやら彼女は朝には弱いらしい。一瞬目を開けかけて再び布団に潜り直そうとした彼女から無理やり毛布を引き剥がし、そのまま私は目の前の光景に固まってしまった。

「……ん～、さむいよぉ。あとちょっとだけ寝た……ん……？　え……？　あれぇ？　ノルンちゃんだぁ。……そっかぁ、手紙読んでくれたんだねぇ」

まだ眠気の抜けない瞼を擦り、ニーナがようやく身を起こした。涎を垂らしたままの唇をふやけた笑みの形に持ち上げた彼女の顔から視線を下せば、傷一つない白い肌が視界いっぱいに広がる。支えるものがなくとも形を保ったままの膨らみは、重力に逆らうかのように先端を天へと向けている。中で暖まっていたからだろう、二の腕や肩、胸元がほのかに色づき、ふにゃりと垂れた目も相まって妖艶さが際立っている。

露出狂じみた自分の格好とは違う、完全な裸。不意打ち気味に現れた肌色の景色から急いで目を逸らし、どうにか気を取り直して仕事を再開した。

「そ、そうよ。わざわざこんな格好でここまで来させたんだから、早く起きて朝食を済ませてきなさい。それから、こんなふざけた格好じゃなくてちゃんとした服を」
「えへへ、朝からノルンちゃんの顔が見れて嬉しいなぁ。でも、朝食ならもう目の前にあるよ～」

瞬間、ガクンッと世界が揺らいだ。

彼女の発言に振り返る間も無く、視界が目まぐるしく切り替わる。何が起こったのか、何をされたのかも分からない。ただ、気がついた時には私の背には主人の温もりを残すベッドが押しつけられていて、布団代わりに覆い被さったニーナを見上げる形になっていた。

ようやく追いついた意識が悲鳴を上げかけるものの、先回りした唇によって蓋をされる。そのまま口内を蹂躙する舌と体の上を艶かしくなぞる手のひらの感触に身を捩らせるが、抵抗と呼ぶにはあまりに心許ない動作でしかなかった。

「……ニー……ナ……待っ、やめて……！　ふ、ふざけてないでしゃんとしなさいっ」

呼吸の合間を縫ってどうにか静止を求める。これでは何のために起こしにきたのか分からないと嗜めたつもりだったけれど、返ってきたのは心底不思議そうに首を傾げる幼馴染の顔だった。

「ふざけているのはノルンちゃんの方だよぉ。【ご主人様に対してその口の利き方はなにかなぁ？】」

ゾッとするほど平坦な声。それまでの幸せそうな雰囲気が嘘のように消え失せたその姿に、選択を誤ったことを痛感する。今の彼女はかつての幼馴染ではなく、奴隷わたしを金で買った主人なのだ。ようやくそのことを思い出した私に追い打ちをかけるように、右足に取り付けられた服従の輪が熱を帯びた。

「……申し訳ございませんでした、ニーナお嬢様。どうか、この身体を好きなだけご堪能ください」

「ん、よくできました～。それじゃあノルンちゃん、【口を開けて】」

唇から紡がれる流暢な台詞。それが自分の口から零れ出たものだと認識した頃には、身体は力無くベッドに投げ出されていた。内心でどれだけ抵抗を試みても、既に自分のものでなくなった身体はまるでいうことを聞かない。

求められるまま口を開けてニーナの舌を受け入れ、思う存分唾液を啜られる。喉を潤した彼女の舌が首筋をなぞり、胸元に張り付いた布を捲り上げた先に現れた乳首に狙いを定め、何度も何度もキスの雨を落とす。左右の胸から交互に伝わる感触に身を震わせ、時折訪れる鋭い刺激に肩を跳ねさせる。その反応を楽しんでいるのか、それまで触れては離れてを繰り返すだけだった唇が右の乳首に固定され、音が鳴るほど強く吸い上げられる。



「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッ！？」

情けないほど早く、呆気なく絶頂へと導かれた。母乳など出るはずもないと理解しているはずの同年代の少女に乳首を吸われ、あまつさえ達してしまうという痴態。今すぐにでも消えてしまいたくなるほどの羞恥に苛まれる私に、乳房から顔を上げたニーナのにやけた視線が突き刺さる。

「ノルンちゃんってば、ココだけじゃなくっておっぱいも弱いんだぁ。あんなにしっかりしてるのに全身エッチだなんて意外だったなぁ。あ、でもニーナ知ってるよ。そういうの、ギャップ萌え、って言うんだよね？」

「……ぁっ、や……はぁ……ひ、ぁ……ぁんっ！？」

この部屋に辿り着くまでに蓄えられた羞恥と度重なる愛撫（あいぶ）によって湿り気を増した秘部の入り口を指でなぞりながら、慈愛に満ちた口調で語りかけてくるニーナ。それに返事をすることも、彼女の表情を伺うことも出来ず、絶え間なく与えられる弱々しい刺激に思考が侵されていく。

そう、弱い。絶頂を迎えるには足りないのに、無視するには持て余す……そんな痺れが全身を駆け巡る。昨日のクンニで発覚した私の弱点（クリトリス）だけを念入りに避け、念入りに快楽が蓄積されていく。

「……ぇ、や、ひぁっ……ぁ……っ、あぁぁぁ……」

先程の乳首舐めよりもか細い声が唇から零れ、それに追従するように貯めこまれたものが吐き出されてく。決して激しくはない、しかし時間をかけた絶頂。本命を受け入れるより早く決壊した膣口から溢れる液体は、主人の寝床に広大な地図を描いていく。昨日の強引な責めによる潮吹きとは異なる、生理的な欲求に近い温水の噴出。意識を残したまま満たされた排泄欲求を痛感して、私の頭の中は羞恥と高揚感、背徳感でぐちゃぐちゃになっていた。

「あ～ぁ、もうおしまいかぁ。それじゃあ続きはまた今度だねぇ。またすぐに戻ってくるから、【それまでは一人で楽しんでてねぇ】」

粗相を働いた使用人を叱るでもなく、股間から指を離したニーナがゆっくりと離れていく。そのまま自分で着替えて部屋を出ていく彼女の背を目で追いながら、先程の刺激を思い出すかのようにひとりでに動き出した指による愛撫に呑まれていった。

S

「ただいまぁ～。意外と準備に時間がかかっちゃって……って、すっかりびしょ濡れになっちゃったねぇ」

扉が開く音と共に視界の外から降ってくる楽しげな声。こちらを見下ろす気配だけはどうにか感じ取れるものの、そちらに顔を向ける余裕も言葉を返す余力も無く、僅かに残る意識は生暖かな液体を溢れさせて止まらない蜜壺を休みなく掻き回す事だけに費やされていた。

「このまま見ていたいけど、お楽しみはこれからだもんね。というわけで、【もう手を止めていいよ】～」

「……っ、ぁんッ……か、かしこまり、ました……ニーナお嬢様……ぃ……ンッッ！」

植え付けられた【命令】を忠実に実行し続けた指の拘束が、帰還した主人の許しを得てようやく解放された。最後の仕上げとばかりに押し潰された肉豆からもたらされる快感に跳ね上がった腰が力無く崩れ落ち、ふやけた入り口に突き立てられた二本の指によって塞がれていた大量の愛液が零れていく。

「……っ……はぁっ、ん……やっと……おわっ、た……ぁ……」

熱に浮かされたみたいに朦朧とする頭をどうにか動かして時計を見れば、ニーナが部屋を出てから一時間が経過しようとしていた。それだけの時間を休みなく自ら快楽を貪るために浪費してしまったという事実、それを遂行させられるだけの強制力を持つ服従の輪の効力に思わず背筋が凍る。一分前まで頼まなくても好き放題に動いていた腕や足には力が入らないのに、重点的に虐められた秘部だけが異様に熱くて……微かな空気の揺れでさえ察知できるほど敏感になってしまったソコに向きかけた意識を引き寄せたのは、額に押し当てられた指先の感触だった。

「ニーナね、ノルンちゃんに会えたら見せたかったものがあるんだぁ。ねぇ、一緒に来てくれる？」

円を描くように額をなぞり、こちらを見下ろす紅い瞳。あどけなさと妖艶さが混じった表情が間近に迫り、小さな唇から紡がれる声が鼓膜を震わせる。触れ合っている一点から

伝わる体温と共に染み込んでいく言葉が意識を蝕み、気がつけば私の身体はひとりでに頷いていた。

第三話　調教開始

三歩先で揺らめく黒髪を追っていると、昔とは立ち位置が逆になってしまった事を改めて痛感させられる。何もかもが初めての事ばかりでキョロキョロ辺りを見渡していたかつての少女の足取りは淀みなく、反対に裸同然の格好を誰かに見られてしまうのではと怯える私は少しの物音にも肩を跳ね上げてしまう。緊張に息を詰まらせる気配を感じたのか、柔らかな笑みを浮かべて振り返ったニーナの手がこちらの掌を包み込んできた。

「……もうノルンちゃん、そんなに怖い顔しないでよぉ。せっかくの綺麗な顔が勿体ないよ？」

「し、仕方ないじゃない！　こんな破廉恥な格好で人前に出て、平気でいられるわけないでしょ！？　それに、ニーナだって私に構ってばかりだと公務が溜まってくるんじゃ……」

「ふっふ～ん、心配御無用なのです。昨日ノルンちゃんをお迎えしてから寝る間も惜しんで一通りの仕事は片付けたから、今日一日くらいだったらお休みしても大丈夫だよぉ。そんな優しいノルンちゃんにはご褒美を上げまぁす……んっ」

どうにかこの場を切り抜けられないかと画策する私の唇が急接近したニーナによって塞がれる。こちらの返事を待たずに押し当てられた唇が触れたのはほんの一秒にも満たない僅かな時間。しかしたったそれだけの触れ合いだけで、昨日の【命令】がフラッシュバックした体から力が抜けていく。離れていく温もりを求めるように口が開いていき、互いの

舌同士を繋ぐ唾液の糸が艶かしく輝いているのが視界の隅に映る。

「……あれぇ？　まだご褒美が足りないんだぁ……もう、仕方ないなぁ。じゃあ遠慮なく……っ」

言葉とは裏腹に口角を引き上げたニーナの顔が再び接近して、行き場を失っていた舌が迎え入れられる。剥き出しの背中に回された腕と、正面から押し付けられるメリハリのある肢体、そして口内に滑り込んでくる舌……ありとあらゆる箇所から彼女の体温が伝わり、どこか柑橘類（かんきつるい）を思わせる香りが鼻腔を突き抜け、五感の全てが彼女に侵食されていく。

ひとたび命じれば昨日のように舌を絡め合わせることだってできる筈なのに、愛おしそうに私を見下ろす彼女の口からその言葉が出る気配は無い。ただし、自分の体を勝手に動かされることへの本能的な忌避感と、求愛というラインを優に超えた舌責めによる蹂躙のどちらがマシだったかを比べられるほどの余裕も残されていないのだけれど。

「ん……ぷは、ごちそーさま♪　あ、それと他の人の目は心配しなくてもいいよぅ？　今日一日は二人っきりにしてもらうようお願いしておいたから……って、そんなことより早く行かないと。ふふ、ビックリしてくれるといいなぁ……」

最後の方は半ば独り言と化した呟きを零すニーナに引き連れられ、ようやく目的地と思しき部屋の前に辿り着いた。ただでさえ入り組んだ廊下の更に端に位置する石扉は他の部屋よりも重厚な造りになっていて、見慣れない紋様が描かれている以外はドアノブどころか鍵穴さえ見当たらない。それなのに、そこへ向けてニーナが手を翳した瞬間、くぐもった音と共に左右に別れた扉が主と客人を歓迎するかのように口を開いた。

如何なる仕掛けによるものなのかも判別できないそれを慣れたそぶりで通り抜けるニーナと、その背に誘われるまま足を踏み入れた私を迎え入れたと同時に、背後で重々しく扉が閉じられる。前を歩いていたはずの少女の気配もいつの間にか無くなり、灯り一つ灯っていない暗闇に取り残された事で不安感が一気に跳ね上がる。しかしそれも一瞬のことで、唐突に点いた照明に咄嗟に瞼を下ろしかけた私は、そこに広がる景色に思わず言葉を失った。

「ようこそ、ニーナの秘密基地へ！　お屋敷の人は勿論、お父さんもここには入れたことないの。つまり、ノルンちゃんが初めてのお客様なので～す」

お気に入りのオモチャを自慢する子どものようにたわわな胸を張るニーナだったが、彼女が指し示したものはその雰囲気にはそぐわない代物ばかりだった。

ここに至るまでの煌びやかな内装とはうって変わって無骨な造りの家具の上には、書きかけの書類や道具が並べられていた。寝台の上に山積みになったメモ書きのような紙片には小難しい式や名前が連ねられており、壁際に備え付けられた棚には怪しい器具や薬品類の小瓶などが保管されている。仕事場というよりは何かの作業場、或いは実験場のような印象を抱かせるその場所で、床に転がっているものを器用に避けて歩くニーナが棚の一角を漁っていく。

「海の向こうってすごいんだよ～？　この辺りでは当たり前に採れる植物や鉱石が向こうでは高級品だったり、逆にこっちでは手に入らない珍しい商品を持ってきてくれたり……怪しいって敬遠する人たちもまだまだ多いのは残念だけど、使ってみるととっても便利なんだぁ」

心なしか口調も幾分か弾んでいるように聞こえる彼女が取り出したのは、手のひらに乗せられるほどのサイズしかない無色透明の球体だった。そのまま流れるような動作で口の中に放り込まれたそれが奥歯に触れた途端、微かな破裂音と共に口いっぱいに濃厚な甘みが広がった。

「……っ、美味しい！　飴、っていうよりジュースみたいな……」

「そうなの！　特別な配合で作れる膜で覆われてるから、結構強く握っても割れないんだよ～。唾液に反応して溶ける仕組みになってるから、片手が塞がっていても簡単に水分補

給ができるんだって。荷下ろしの人たちにも試してもらったんだけど、結構評判がいいんだぁ」

「こんな物があるなんて知らなかったわ……これ全部ニーナが集めたの？」

「えへへ、すごいでしょ～？　……ニーナね、ノルンちゃんと離れ離れになってからずっと考えてたんだぁ。貴族として困っている人たちを助けるのに、ニーナができることって何なんだろうって。だから、たくさんお勉強して、お仕事を手伝って、色々なものを見て回って……ノルンちゃんに教えてもらった『高貴な者の責務』の果たし方として胸を張れるものに出会えたんだぁ」

えへん、と実際に胸を反らしてみせるニーナの口から語られた台詞に、私は再び言葉を失った。今しがた彼女が示したものだけでなく、この部屋にある物のほとんどが魔術、あるいは錬金術と呼ばれる特殊な製法で生み出されたものなのだろう。使い方次第では大勢の人の命を左右するそれらの目利きには膨大な知識を必要とすると耳にした事があるが、彼女がそれを成し得るだけの努力を重ねてきたことは、部屋中に並べられた大量の道具たちが証明していた。しかもその根幹にあったのが新参者を前に偉ぶりたかっただけの幼い自分の発言ともなれば、それをいつまでも覚えられていた羞恥心も相まって妙なむず痒さを覚えてしまう。

だからこそ、私はそれに気付いてしまった。書類に侵食されるあまりしばらく使われていなかったであろう寝台の下から、この場に不釣り合いなピンク色のマットレスが顔を覗

かせている事に。

「ねえ……ニーナ？　あれって……」

まさしく頭に冷水を掛けられたように、無意識に緩んでいた緊張の糸が張り詰める。その直後、無意識のうちに零れたその呟きを耳にしたニーナの顔に浮かんだ表情を目にして、気付かないふりをしなかったことを全力で後悔した。

「それはもちろん、ノルンちゃんに楽しんでもらうためのものだよぉこの子たちを見てもらいたかったのも嘘じゃないけど、むしろ今からがメインディッシュだからねぇ」

玩具を前にした子どものような笑顔は変わらずに、顔の横に添えた指をパチンと鳴らす。軽快な音が耳に届くと同時にほんの一瞬だけ思考が濃霧に包まれ……気がつけば視界には扉と同じ石造りの天井が広がっていた。かろうじて動かせる瞳を下に向ければ、覆い隠すもののない二振の膨らみが呼吸に合わせて揺れているのが確認できる。上半身から伝わる微かな空気の揺れが、唯一の衣装も脱がされてしまったことを如実に表していた。

「ちゃんと準備ができたみたいだねぇ、えらぁいえらぁい。それじゃあ今度はこっちの感想も聞かせてねぇ？」

視界の端からひょこんと顔を出したニーナの手に握られていたのは、ピンク色の液体が入った小瓶。コルクを開けたそれから垂れる液体を馴染ませた彼女の手が肌に触れたと認識した瞬間、燃えるような淫熱がそこから一気に広がった。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッ！？　か……ぁ、ひ……っ」

「これは『淫魔の香油』っていうサキュバスの愛液を調合して作った特別なオイルでね。希釈して使えば気付け薬になるんだけど、原液を塗り込むことで相手の体を敏感に改造できちゃうんだよぉ」

こんな風にね、と続いた言葉は自分の啼き声で掻き消された。オイルの冷たい感触が肌の上をなぞるだけで、いとも容易く絶頂に導かれてしまう。愛撫とも呼ばないような、ただ指を這わせるだけの行為。胸の膨らみを下から掬い上げる形で撫でた手のひらの軌跡を辿って、ゾクゾクとした痺れが全身を駆け巡る。

調教なんて生やさしいモノではない、文字通りの『改造』。埒外の快楽を叩き込まれた脳が一瞬でオーバーヒートして、視界だけでなく思考まで真っ白に染め上げられる。

「……ぇ、あ……ハッ……おね……がい、します……やめ、て……くださ、い……おねがい、します……」

色を取り戻した世界で真っ先に耳にしたのは、情けなく助けを乞う自分の泣き声だった。恥も外聞もなく生まれたままの姿で棒だの涙を流す私の懇願は、しかしそれを向けられた少女にとってはお望みのものではないようだった。

「そうじゃないでしょお。ノルンちゃんだってエッチな身体になれた方が嬉しいよねぇ？」

にんまりと悪戯っぽい笑顔を返してくるニーナの人差し指が胸元から腹部へと伝っていく。ゆっくりと下りていった指先が臍の窪みに沈んだ途端、甘く切ない疼きが下腹部を満たしていき……それとは別種の痺れが脳へと送り込まれていった。

「はい、とても嬉しいです。是非、ノルンのことをエッチにしてください」

服従の輪によって突き動かされた唇が賛美の言葉を口走る。心の中でどれだけ抵抗しようとそれが表に出ることはなく、表情までも恍惚としたものに変えられて主人の指を受け入れる準備を整えてしまう。

そこから先はニーナの独壇場だった。自分が無理矢理言わせたものとはいえ、愛すべき奴隷からの『おねだり』に応えようとするニーナの手つきに遠慮や容赦といったものは全く混じっていなかった。

肌を撫でるだけには留まらず、先端を固く勃ち上がらせた紅の乳首やぷっくりと膨れ上がったクリトリスを執拗に責め上げられ、休む間もなく絶頂をその身に刻み込まれる。

勢いよく潮を噴き出した腰が跳ね上がり、それを上から押さえ込む腕の圧力が更なる快楽を引き摺り出す。

陰唇の内側までオイルを塗りたくられ、内側を走る水流さえ快楽の引き金と化したその場所から愛液か尿かも判別できない体液がマットレスに染み込んでいく。

「すっごぉい……すっかりグショグショになっちゃった。でも、ノルンちゃんばっかり気持ちよくなってるのはズルいなぁ……」

いつまでも止まないオーガズムの余韻に苛まれる意識の片隅で、誰かの声に混じって衣擦れの音が届く。眉一つ動かすにも苦労する体からどうにか力を絞り出して、いつの間にか閉じていた瞼を開くと、そこには肌色の楽園が広がっていた。

「……ん、ぁ……ねぇ、ノルンちゃぁん……シてぇ……？　ニーナも……欲しくなっちゃったぁ……は……ふ、ぁ……」

馬乗りになってこちらを見下ろすニーナの顔に、これまでのような余裕は存在しなかった。熱く火照った頬に普段以上に蕩けた声音で語りかけてくる様は、初めての酒に酔わされたような……或いは発情期を迎えた猫のような雰囲気を醸し出していた。身につけていたドレスはどこかへ脱ぎ捨てられ、重力に従いながらも綺麗な形を保った乳房が柔らかさを誇示するように眼前に差し出される。その先端が既に私のものと遜色ない程に濃く色付いている事が自らが辱めた奴隷を目にしてのものなのか、気化した香油を吸い込んだ事が原因なのかは分からないし、それを探る事に意味がないことは不思議と理解できた。

「……はい。ニーナお嬢様のお望みのままに……」

今までに見たことのない幼馴染の煽情的な姿にあてられた脳へと一方的に送られてくる台詞をそのまま出力する。数えきれないほどの絶頂に犯された意識は思考を放棄して、内なる衝動に突き動かされるまま両腕を広げて主人を迎え入れる。サキュバスの魔力によってすっかり出来上がった身体は同性の胸に押し潰されただけで容易く達してしまうまでになっていて、それでも求められるまま彼女の体にも香油を馴染ませていく。

「……ん……ちゅぶ、ノルンちゃぁん……んむふぅ……」

「ちゅ……じゅる……ん、ふぅ……お嬢、ッ……様……」

柔らかな二の腕に。癖になる揉み心地の臀部に。互いの胸と太ももを擦り合わせながら、貪るようなキスを重ねていく。頭の中には目の前の人物を気持ちよくさせることしか残っていなくて、どちらからともなく身体を起こした二人の腕が相手の腰に添えられる。足を交差させてゆっくりと抱き寄せ……やがて二つの性器がピッタリと重なり合った。

「「ふあぁぁぁぁ……っ！！！」」

二人分の嬌声がシンクロする。今までに触れられたどこよりも芳醇な快感が駆け巡る。気が付けば腰が勝手に動き出して、お尻を卑猥に波立たせながら淫裂同士を擦り合わせていた。

「ひっ、ん、はひッ、あ……ひぁぁぁぁン！？」
「やぁぁ！　あ、ンぁあああ！？　ぁ……お、お……ッ～～～～～～～～～～！！」

襞と襞を塗りつけ合う卑猥なキス。くちゅくちゅと卑猥な粘着音を鳴り響かせるそれに白旗を上げたのは、意外にもニーナの方だった。声にならない悲鳴と共に崩れ落ちた彼女は息も絶え絶えといった様子で天を仰ぐが、数秒と経たない内にその目が見開かれる。力の抜けた彼女の片足を持ち上げ、抱き抱えた拍子に生まれた空間に再び股間を滑らせれば、それまでよりもさらに密着した秘部から追加の快楽電流が送り込まれた。



「あ、あぅ、ンンっ、ぁ……ふぁあぁぁぁあっ！」

天井からの照明を無機質に反射する道具たちに見守られる密室の中で、どちらから発せられたものかも分からない甘ったるい声が反響する。淫裂から溢れた蜜が体中に塗りたくられた淫魔の香油と混じり合い、媚薬のように二つの性器を疼かせる。仰向けのまま身を反らせてよがり狂うニーナと、円を描くように腰を動かして陰核同士を密着させる私。どこまでもエスカレートしていく快楽の奔流は、しかし唐突に終わりを迎えた。

「……い、ぁ……ニ、ニーナお嬢様っ、イ……イっくぅぅうッッ！？！？」

「も、もうダメ……ノルンちゃん！　ノルンちゃんノルンちゃ……ふぁぁぁあああぁぁぁっ！！！！」

身体が硬直した瞬間、密着していた下の唇から大量の蜜が噴き出す。僅かな隙間もないほど強く押し付けあったそこに放出された水流は、ただでさえ敏感になった性感帯に受け止められるレベルのものではなくなっていた。もはや何の液体かも分からないほどにベトベトになった相手の恍惚とした顔を目に焼き付け、処理能力の限界を迎えた意識は眠るようにブラックアウトしていった。

第四話　ニーナとの日々

『ニーナの気が向いたときにニーナの好きなように弄ばれる』……元・幼馴染のご主人様との倒錯的な関係はそれからも続いていった。

肩書きこそ『使用人』として扱われているが、右足に取り付けられた金色の輪が本来の身分を如実に表している。当然ここで働く誰よりも身分が低いのは明確なのに、食事や掃除の仕事を任せられることはなく、それどころか敷地内であればどこでも自由に出入りする許可まで下りているほどだ。本来重労働を強いられる奴隷という立場を踏まえれば破格の待遇には違いないのだが、それを素直に喜ぶだけの余裕はなかった。

ｓ

「ふふふ、くすぐったいよぅ。ノルンちゃんのスポンジ、ふわふわしててとっても気持ちいいねぇ。ねえねえ、もっとぎゅぅ〜っとして？」

貴族・平民問わず誰でも使えるようにと開放されている大浴場を貸し切って、湯気を吸ってしっとりと濡れたお団子を二つ頭に結わえたニーナがこちらに振り向いてきた。バスチェアに腰かけた彼女の身体は私の腕に収まる形になっており、首元や肩に浮かんだ汗が照明を反射しているのが間近に見える。

「はい、かしこまりました。ニーナお嬢様……」

そんな彼女の要望に応えるべく、私の身体はお望みの『スポンジ』……泡まみれの乳房を背中に押し付けていく。熱気にあてられて紅く色づいた胸の膨らみが押し潰されていく様がはっきりと見てとれて、じくじくと先端に触れるこそばゆさに甘い声が漏れてしまう。背後から抱きすくめるように腕を回し、円を描くように上半身を擦り合わせていくたびに、鏡に映る自分の顔にも淫靡な色が増していくのを自覚させられてしまう。それがニーナを悦ばせるだけだと頭の中では分かっているのに、自分のものでは無くなった肉体は主人の願望を叶える為だけに動いていた。

「ふぅ、ありがと～。それじゃあ今度はニーナがノルンちゃんの体を洗ってあげるね？」

主人の体を覆う泡を洗い流そうとシャワーに伸ばしかけた腕をやんわりと止められ、腕の中でクルリと向きを変えたニーナがこちらを見上げてくる。悪戯っぽい光を宿した瞳に覗き込まれた瞬間、全身を使った奉仕に勤しんでいた手足がまっすぐに伸び始めた。

まだ泡を纏ったままのニーナが背後に回り込むと、鏡には右脚の輪を妖しく輝かせながら直立する私の全身が映ってしまう。熱気と刺激を与えられすぎて紅く火照った乳首や処理が間に合わない陰毛まで丸見えにさせられているという恥辱に満ちた所業から目を離すことも許されず、肌の上をなぞる掌の感触をただただ受け入れることしか出来ない。

「ノルンちゃん、恥ずかしがらなくて良いんだよぉ？　どこが気持ちいいかきちんと教えてくれないとニーナも困っちゃうから、【自分に正直になって、気持ちよくなっちゃおうねぇ】」

ただ、その在り方には背後の主人は不満があったらしい。唇を結んで声を抑えようとする私の太腿をなぞる指が輪に掛かると、脳天へと突き抜ける電流が思考を灼く。たったそれだけで強張っていた肩から力が抜けて、背に感じる柔らかなクッションに身を預けてしまう。

「……はい、ニーナお嬢様。ノルンのエッチな体、隅々までゴシゴシしてください」

淫蕩に満ちた表情を浮かべる自分の喉から紡がれた甘くふやけた声が浴室に反響する。身動きの取れない自分の代わりに乳首や秘部を覆う掌を受け入れ、無遠慮に弄るそれから逃げるどころか自分からおねだりするように身を捩らせる様は、第三者からすれば誘っているようにしか見えないだろう。本心とは真逆の行為に抵抗しようとしたところでそれが実を結ぶはずもなく、私がのぼせかけるまでニーナとの『洗いっこ』を続ける羽目になった。

「ひ……いあっ！？　……あぁっははははははははははは！！」

また別の日。完全防音の調教室にあまり品がいいとは言えない笑い声がこだましていた。片付けられた寝台に生まれたままの姿で横たえられたまま荒い息を整えようとする私の視界には、お腹の上で馬乗りになったニーナがサディスティクな笑みを浮かべているのが見える。両手に持った羽根ペンをくるくると器用に回す彼女は、内なる高揚感を隠しきれないといった様子でこちらを覗き込んでくる。

「もう、ダメだよ～。十秒耐えたらおしまいって言ってるのに、これで三回目だよぉ。足の裏も、脇の下も、お腹の上もぜーんぶ敏感なんて……こんなにくすぐったがりだったなんてちょっと意外だったなぁ」

「……っ、そん……な……ことっ言われて、も……！　こればっかりはどうしようもな……っ、ぁんッ！　や、やめ……くひぃィィ！？」

合間を縫って口にした反論も、臍下辺りをひと撫でされただけで容易く中断させられてしまう。肺に酸素を取り込むこともままならず、それでも必死に無理、お願い、死んじゃう、と搾り出したことで、ようやく腹部から送られ続ける刺激の供給が止まった。

「うーん、ニーナはノルンちゃんの笑ってる所が見たかっただけなんだけど……死なれちゃうのはイヤだからこれはもうやめておくね」

その言葉と共に腹部を圧迫していた重みが消える。あっさりとした幕引きに拍子抜けしたものの、これでようやく解放される……拷問じみた責め苦から逃れられることに心の底から安堵していた私は、依然として寝台に身体が張り付いたままである事に気付けなかった。

「……へぇぁあぁああッ！？」

再び口を衝く甲高い声。それが自分の喉から零れ出たものである事にも驚いたが、問題はその原因……乳輪（にゅうりん）をなぞるように滑らせた羽先からの刺激の方だ。息つく間もなく再び近付いてきたソレは、狙いを乳頭の先端に変えて襲ってくる。細やかな羽毛にそこを押し込むだけの力があるはずもなく、表面をなぞるだけに留まる……逆にそれが快楽をもたらす毒となって、硬直した体に染み渡っていった。

「あんまり激しくしちゃうとノルンちゃんが苦しそうだから、今度は優しく撫でてあげるねぇ。他にまだ今日触ってないのは……あ、良いトコみーつけた♪」

発散するにはあまりにも弱々しく、か細い感触が体内に蓄積していく。両胸に触れていた羽の片割れが下半身へと滑り、淡い媚肉（びにく）をさわさわと撫でて膣口（ちつぐち）の少し上にある小さな突起にふわりと触れた途端、寝台に仰向けになったままの体がひときわ大きく反らされた。

「あ、や……イヤ……だめ、いじわるしないで……もっと、ちゃんと触っ……て……！」

「え～。やめてって言ったりもっと触ってって言ったり、難しい注文ばっかりしないでよ～。心配しなくても見ててあげるから、存分に気持ちよくなっちゃえ～」

包皮に隠れた付け根は少し力強くクリクリと。隠れ切っていない先端は、より弱い力ながらふわふわとした羽根の先っぽで繊毛をじっくり味わわせるように。溢れかえる蜜で羽先がダメになっていくのも厭わずにクリ弄りを継続するだけでなく、左右の乳首を平等に玩ぶのも忘れない。いじらしく体を捩らせる私の反応を楽しみ、しかし決してイカないよう微調整を繰り返すニーナの顔を視界いっぱいに収めながら、いつ終わるともしれないくすぐり地獄に呑まれていった。

S

またある時は、一日中『お人形』としてニーナの遊び相手に任命させられていた。

「ん……！　ふ、んぐっ……むぅ……ちゅぱ……じゅるるるっ！」

決して品が良いとはいえない粘ついた音が足元から奏でられる。その出所へと向けられた瞳が捉えたのは、身に纏うドレスが汚れることも厭(いと)わずに床に直接跪き、一心不乱に目の前の淫裂に顔を寄せるニーナの姿だった。揺れ動く黒髪の隙間から覗く瞳は心底幸せそ

うに細められていて、緩みきった陰唇から溢れる蜜を内側に挿し入れた舌で掻き出していく。

「……ッ！」

内壁から戻ってきた舌先が陰核を弾いた瞬間、真一文字に結ばれた唇から吐息が漏れた。絶頂を報せる甘い声は零れず、しかし快楽を溜め込んだ体は潮を吹いて足元の少女の顔を彩っていく。半透明の粘液を目を閉じて受け止めた彼女の顔に不快感はなく、むしろ悦びに満ちてさえいた。

「……んむっ。やっぱりノルンちゃんってクリトリスが弱いんだねぇ。ねえ、気持ちよかったぁ？　ニーナに内緒で自分一人で弄ってるのと、どっちが気持ちよかったのかなぁ？」

絶頂の引き金と化した膨れ上がった陰核を指でこねくり回しながら、こちらを見上げてくるニーナが心底愉しそうに尋ねてくる。尤も、今の私にそれに答える権利は無いし、後頭部で組んだ状態で固定された両手では執拗に一点を責める指を取り押さえることもできない。度重なる性奉仕に火照らされた肉体を慰めている瞬間を見咎められた私は、朝一番から彼女の命令により『クンニ人形』として弄ばれていた。

――【お人形だから許可が降りるまで喋ってはいけない】
――【どんなに恥ずかしいポーズでも決して動いてはいけない】
――【おまんこを舐められることがクンニ人形にとっての幸せだから、舐めてもらえるようにおねだりをしないといけない】

立て続けに刷り込まれた三つの暗示は容易く私の肉体を支配し、脚を大きく広げて腰を落とした裸体を見せつけるという淑女らしからぬ格好でニーナの情欲を満たすための道具として過ごす羽目になっていた。

ドクンッ、と心臓が脈打つ音がいやに大きく響く。いつまでも訪れない舌の感触に急き立てられるように、それまで微塵も動かなかった腕が降りていく。汗を浮かべる肌の上を辿って到着した下腹部に添えた指に力を込めると、ただでさえ熱を帯びたその場所からぐちゅりと卑猥な水音が零れた。

「ニーナお嬢様ぁ……意地悪ばかりしないでくださいぃ……。どれだけ舐め取られてもクリトリスをイジイジされただけで簡単におつゆを溢れさせちゃうよわよわマンコ、いつでも準備万端です……我慢が出来ずにオナニーしちゃう淫乱奴隷に、お嬢様のお仕置きクンニをお恵みください……！」

陰核を爪先で撫で続けるニーナに向けて愛液を滴らせる秘部を左右に広げた私は、表情さえも操られて懇願（こんがん）の言葉を口にした。自分の意思など介在しない、彼女の思い通りの台詞と行為を強制させられた事に対する屈辱の念は、再び与えられた舌の温もりによってあっさりと押し流される。作られた幸福に浸り、滂沱の涙を流して念願の快楽に犯される私は、日が沈むまで何度も何度も快感の高みへと飛ばされ続けた。

「……っ、ふ、は、はぁ……今日も楽しかったよぉ、ノルンちゃん。それじゃ、おやすみなさぁい」

荒い呼吸を繰り返しながら天井を見上げる私に手を振って、満足げなニーナが部屋を後にする。室内に充満する雌臭はむせかえるほどに甘ったるくて、この部屋での行為がどれほど激しいものだったかを窺わせた。

第五話　もう逃げるしかない

この屋敷に来てからの半月間、ニーナによる快楽調教の餌食にならない日は無かった。服従の輪による強制操作、淫魔の香油による性感開発、その他あらゆる道具と手段によって弄ばれ続けた身体は、彼女が見せる簡単な合図一つで発情させられるほどに快楽に染まってしまっていた。

（……もう限界。これ以上ここにいたら、本当に頭のおかしい変態女にさせられてしまう）

イカされたばかりで上手く力が入らない腕で体を起こす私の思考がそう結論づけるまでに、そう時間は掛からなかった。

S

皆が寝静まった夜。なるべく音を立てないように扉を開けた私は、月明かりのみに照らされた廊下に躍り出た。巡回の衛士らしき人影が見当たらないことを確認して、足音を消してくれる分厚いカーペットの上を急ぎ足で駆けていく。

この屋敷で過ごしてみて気付いたのが、服従の輪の効力についてだ。この輪に登録された主人の命令には絶対服従を強いてくるコレは、本人の意識が介在しない場合にはただのアクセサリーでしかないらしい。遠隔操作による招集や手紙に書かれた文面を実行させるなど必ずしもニーナがそばにいなければならないわけではないが、少なくとも今のように彼女が眠っている時に体を操られるといった事はなかった。

加えて一度眠りについたニーナはよほどのことがない限り朝まで熟睡する事は、毎日起こしに行かされる中で証明済みだ。今までは疲労と快感によって意識を失ったまま朝を迎えていたが、こうして夜中まで起きていられる機会が次いつ訪れるか分からない。まして下手に準備をしているところを怪しまれてしまえば、自白するよう命じられて一巻の終わりだ。だからこそ、突発的な脱走に踏み切った今が正真正銘最後のチャンス……それを念頭に入れて足を動かしていたら、いつの間にか玄関の前まで辿り着いていた。

(ここまでは誰にも会わなかった……。こんなところまで来れたって事は、多分気づかれてもいないはず。でも、ここから先は間違いなく見張りが居る……どうしたものかしら)

それでももう後には引き返せない。ここが正念場だと意気込み、まずは外の様子を確認しようと玄関の扉に手を掛け……

――――ドクンッ

「……ぇ」

視界が揺らぐ。目眩にも似た感覚が脳を揺さぶり、ドアノブに掛けた手ごとその場にへたり込む。毒でも仕込まれていたかと焦る内心と裏腹に、脈打つ鼓動に後押しされるように湧き上がる熱に浮かされる身体がたまらなく疼き始めた。

（う、そ……コレって……でも、何で……！？）

何の前触れもなく湧き上がってきた衝動に、疑問符と快感に染まる頭で必死に思考を巡らせようとする。毒、という予感はある意味では正しかったのかもしれない。ただし、私にはその正体にあまりにも身に覚えがあり、それに抗うことも出来ないことまでも理解させられていた。

ニーナによって幾度となく刻み込まれた肉欲が全身を蝕み、脱出しようとする力を削ぎ落とそうとしてくる。この場に留まっていれば誰かに見つかる可能性も高まる以上すぐにでもここを離れないといけないのに、熱と疼きに苛まれた体はまるで言う事を聞かない。

「……ん、ふ……ぅぅ……ぁあ……っ……」

何かがおかしい。自分の身に起きた異常は気になるものの、疼きを抑えないことには脱出もままならないと、内なる衝動に抗うことなく剥き出しの肌を指でなぞる。途端に信じられないくらいに甘くいやらしい吐息が零れて、背筋をゾクゾクとした痺れが走る。この場を脱するために仕方なくやっていることなのだと自分に言い聞かせて、臍下をなぞる右手を胸の方へと滑らせ、左手の方は太股を軽く揉みながら内側へと侵食していく。

「ふぁっ、ん、あ……はぁぁ、く、ふぅぅ……ん、んんっ！」

抑えきれない吐息が結んだ唇の隙間から洩れる。深々と刻まれる谷間を形成する胸に手のひらが沈み込み、じわじわと甘い刺激が脳内へ送り込まれる。

指先が掠めるぷっくりと膨れ上がった乳首とそれを覆うように形成される乳輪を重点的に刺激してやると、弱点を責められた肉体が即座に白旗を上げた。辺り一面が真っ白に染まるほどの小爆発が脳内で引き起こされ、反り返った背を震わせながら天を仰ぐ。

「ふぅぅ……んふ、は、あ……あんっ、ぁ……んんっ」

甘く広がるアクメの波に身を任せ、乳首の周りをくるくると指先でなぞる。硬く尖ったそこをピンッと弾けば、電気を流されたように双丘が揺れる。イッたばかりの身体を再び慰める指に、それだけでは足りないと言わんばかりに内腿に滑らせた左手が股間を弄り始める。乳首責めだけで出来上がったソコは内側から滲み出た愛液でぬるぬるになっていて、侵入者たる指をも容易く飲み込んでしまった。

「く、ひぃぃっ……あ、え、ぁ、おっ、おっ、お……んぉおおおおぉぉオ……ッ！」

快感を求めて入り口を割って根元まで突き挿れた指が膣の中を引っ掻くように動いていく。あと一回だけ、ここで全部発散させておかないと、と頭の中の誰かに言い訳を重ねながら、愛液を絡めた指で膣口の上で硬くなっている突起をキュッと摘まむ。

「んひぁぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃッッ！？！？」

その瞬間、見えない糸に引っ張られるように背中が弓なりにしなり、甲高い悲鳴があたりに響き渡る。全身を激しく痙攣させたその振動で指に摘まれたままのクリトリスと乳首が扱かれ、ガクガクと視界が跳ねる。体全部が蕩けるくらいに熱くなって、イッた直後特有の疲労感が押し寄せてくる。



それなのに、疼きは引いていくどころかさらに激しさを増していくばかり。

（どうして！？　いつもならもう治まってるはずなのに…！？）

困惑する私の意志を無視するように勝手に動き出した指が膣内（ちつない）を行き来して、すっかり皮の剥けたクリトリスを抓（つね）り上げる。タガが外れたように押し寄せてくる快感にも満足しなくなってしまった体に困惑する私は、どうにかしてそれを治めようと辺りを見回す。すると、程なくして見つかったのは壁の隅に置かれた一対の机と椅子だった。

――――アレを使えば気持ち良くなるかもしれないよぉ？

ピリッ、と頭の中で誰かの声が聞こえる。

ここには居ない、しかし確かに聞き覚えのある声。唐突に脳裏に響き渡ったその言葉が、快楽に当てられて麻痺した思考に染み渡っていく。その言葉の意味を咀嚼する間も無く、どれほど力を込めようとも動く気配の無かった脚がふらふらとそちらへ歩み寄り、やや丸みを帯びた机の角に腰を押し付けた。

「ふあっ、あっ……！」

鋭く、無骨な感触が下半身を刺激する。下から上へ、上から下へ、膝と腰を使って角にスジを這わせて擦り付ける。時折角度を変えて、自分の理想のスポットを探し、その度に陰唇（いんしん）と肉豆がこねくり回される。勉学のための道具で自慰（じい）に耽る背徳感は格別で、些細な角度の変化で痛みと快感が切り替わる感覚に悶えながらも、ぐりぐりと動く腰使いに艶（なまめ）かしさが増していく。

――――ゴリィィッ……！

「ふゅぅうぅぅぅう！？！？」

更なる快楽を求めようと腰をズラした瞬間、今までとは比べ物にならないほどの圧が一気に押し寄せてきた。自分の最も感じる所に最も良い角度で押し込まれた机の角の硬さに、両手両足をピンと伸ばして快楽を享受する。

そのまま崩れ落ちるように上半身を倒れ込ませると、潰れた胸の先端で刺激を求めていた乳首が机の表面に押し当てられる。敏感な二点から伝わる追い打ちに息を詰まらせた私だったが、一度昂（たかぶ）りを覚えた体にブレーキなど機能していなかった。

「……まだ……まだ、足りない……」

うわ言のように零れ出た言葉に導かれるように、机に押し付けた股間を細かく振動させたまま引き出しを漁る。二段目、三段目と下に行くにつれてより一層強く押し付けられる股間からの刺激に蕩けそうになっていた私は、最後に開けた引き出しにしまわれていた道具に目を奪われた。

「……ん……ぅ、ぁ……ッ」

思わず漏れた感嘆の吐息が熱を帯びているのを自覚する。

そこに隠されていたのは、種々雑多（しゅじゅざった）な形状や大きさが揃えられた棒状の代物だった。書物でしかみたことがなく、それを生で目にするのは当分先だと教わってきたその形……即ち、異性の性器を模したディルドーやバイブ棒。ここに来る前であればその用途を理解する機会などなかったのだろうが、幾度となく訪れたニーナの『秘密基地』という名の調教部屋にも並べられていたそれらの使い方は、しっかりと頭の中に覚えこまされていた。

（……あ、れ……？）

ピリッ、と微かな違和感が首をもたげる。

何かが、おかしい。断続的に送られてくるアクメ電流に焼け焦げる思考の中で、目の前に並んだ道具たちを見下ろした。

実際にそれを経験したことはないものの、それらがどんな目的で使われるのかについてはこの屋敷に来てから一通り教えられている。それを使う用途こそ違えど、いずれも人為的な快楽をもたらすための物……それが何故こんな玄関先に、しかもこんなにも大量にしまわれているのか。

――わぁ、たくさんオモチャを見つけたねぇ。折角だから、全部使ってみないともったいない気がするなぁ。

掴みかけた疑念を取りこぼしてはならないと、引き出しの中の卑猥な棒達を注視する私の頭の中で、再び同じ声が響く。たったそれだけで、決意を固めたはずの精神が脆く解きほぐされる。

「……そうよ……もっと気持ち良くならないと……早くイカなきゃ……イカなきゃ……イカなきゃ……」

頭の中に反響する声に頷いて、並べられた中から金属質で頭の大きなバイブを握る。東洋の伝統的な工芸品に『コケシ』なる物があると聞いたことがあるが、形状としてはそれに近い。机に突っ伏したまま片手でそれを握り、球体部分をゆっくりと股間に押し当てる。

「……ん、ぐうぅぅッ！！　ぅ……すご……イギィっ！？」

表面に押し付けられた体温を感知した瞬間、無機質に振動した球体が股間全体を撫で回していく。それは角オナで虐め抜かれてきた秘部にとっては暴力的なまでの圧力で、口を開いた陰唇と勃起した陰核を際限なく責められた私は腰を浮き上がらせてひたすらにイかされ続けた。

「は、ぅぅぅぅ……っ、こ、こんどはっ、なに……」

机にうつ伏せになってバイブ責めを味わう中、手持ち無沙汰だったもう片方の手が引き出しの中をまさぐる。やがて手探りでお目当ての物を握りしめた私はひとりでに身を起こし、備え付けの椅子の方へと向かっていく。

バイブは股間に添えたまま辿々しく歩いた私の手が、もう一つの得物を椅子の上に貼り付けた。黒光りするその棒は、先端から根元の吸盤にかけて徐々にサイズが増していく真珠を連ねたような形状をしていた。しっかりと座面に吸着していることを確認すると、それを跨いでゆっくりと腰を下ろしていく。

「ひゃあうっ！？　ま、待っ……んはっ、あひぃぃぃんっ！」

それがもたらす結果に今更思い至ったところで、脚を広げながら沈んでいく体は止められない。キツく窄められた菊門の中央に穂先を意識した直後、一息に奥へと突き込まれた球体が直腸内へと潜り込んだ。

「――――はへぇぇぇぇッッ！？！？」

『出す』ことが目的であるはずのその場所から駆け巡る強烈な快感。異物を飲み込む狭い穴からは形容し難い圧迫感が込み上げてくるが、それ以上に後を引く幸福感に塗りつぶされていく。ビリビリと痺れる快感に意識が朦朧としていくのに、休むことを許さないかのように再び両脚に力がこもる。

「……くふぅっ！　んお……ぉ、ほぉぉお！？　す……すご……おしり、こわれちゃ……すき……すき、だいすきぃ……！」

ふやけた陰唇の隙間にバイブをあてがい、内部からの振動に背を反らせた。それだけでも十分すぎるくらいなのに、アナルパールまでもがグニグニと蠢(うごめ)いて奥へ奥へと滑り込んできて、壊れたように腰を上下させて快楽を貪ってしまう。

知性や理性など欠片も残さない圧倒的な物量の快感。何時の間にか逃げようという気持ちは無くなり、ただ気持ちよくなりたいという欲望だけが頭の中を侵食していった。

S

ツンと据えた臭いといつもより固い感触に、暗闇に沈んでいた意識が引き上げられた。あまり快適な目覚めとはいえないその感覚の中でゆっくりと瞼(まぶた)を開けると、馴染みのない光景が目に飛び込んでくる。いつもの部屋よりもずっと奥行きがあって、目線がさらに低い。まるで床に寝転んでいるかのような……

「おはよう、ノルンちゃん。随分変わったところで寝てるんだねぇ？」

底冷えするかのような声音が頭上から降ってきて、ようやく半分しか機能していなかった意識が覚醒する。右腕を両足の隙間に挟んだままうつ伏せに倒れていた体を恐る恐る起こすと、何の感情も浮かんでいない顔で私を見下ろすニーナの姿があった。

「服従の輪っていうのはね、あらかじめ条件付けをしておけば主の命令がなくても機能する仕掛けになってるの。【もしニーナから逃げようとしたら、その場で意識がトぶまでオナニーをし続ける】……あの奴隷商人さんに言われて冗談のつもりで設定したのに……そっかぁ。ノルンちゃん、ニーナから逃げようとしたんだね」

抑揚もなく、淡々と紡がれる言葉が身動きの出来ない私に突き刺さる。そこにはいつものような和やかな雰囲気はなく、信じていた者に裏切られた事への怒りと悲しみが滲んでいた。

第六話　お仕置きの時間

いつもより足早に廊下を進むニーナに引き連れられて辿り着いた調教部屋。直立姿勢で待機を命じられた私の目の前で、棚の最奥から取り出した箱の封を解いていくニーナが滔々と語り始めた。

「ねえ、ノルンちゃん。どうして逃げようとするの？　外の世界はもっと怖いんだよ？　自分では気にしてないかもしれないけど、ノルンちゃんはとっても美人さんだもん。あのまま外に出て悪い人に連れ去られちゃったら、もっと酷いことになるに決まってるんだよ？　だからニーナと一緒に幸せな毎日を過ごしてくれればよかったのに、どうしてニーナからも逃げようとするの？　そんなにニーナが嫌いなの？　そんなにこの暮らしがイヤなの？」

矢継ぎ早に紡がれるその言葉は返答を求めてのものではないのだろう。虚ろに濁った瞳はこちらの景色を反射するだけで、壊れたネジ巻き人形を思わせる雰囲気に背筋が凍る。普段の間伸びした声も鳴りを顰め、昔から変わらないおっとりとした空気も淫熱に浮かされた狂気的な笑みとも違う気配を目の当たりにして今すぐにでも逃げ出したいのに、彼女の支配下に置かれた身体は指先一つ動かない。

そうこうしている間にニーナの方は準備を終えたらしい。金属製の箱から取り出されたのは蛍光ピンクのゼリーのような光沢を纏うU字型の軟体だった。二又に別れた先端はキノコのような傘が出来ていて、拳大の太さを有する棒の表面にはたくさんのイボのような模様が形作られている。その一端を跨ぐように股間に向けると、ゆっくりと陰唇の隙間に滑り込ませ……ガクンッと激しく身を震わせながら半ばまでそれを呑み込んだ。

「本当はこれだけは使いたくなかったの。ノルンちゃんにはずっと幸せでいてほしかったし、自分の意思でニーナを愛して欲しかったから……でも、こうするしかないんだよね」

その涙は諦観の表れか、はたまた異物を受け入れた股間から伝う血によるものか。緩慢な動きで接近してくる彼女に捕まれば一巻の終わりだと、本能が訴えかけてくる。散々試して無駄だと分かっているけれど、一縷の希望に縋って自分のものでなくなった身体に喝を入れ、ここにいない誰かに助けを求める。

「ねえ、これが最後のお願いなの。【ノルンちゃん。ニーナを受け入れて】」

そんな些細な抵抗を嘲笑うかのように紡がれた懇願の声。今までのように上から投げかけられるのではない、不安に満ちた声色。お願いとは名ばかりの呪いの言葉が鼓膜を震わせた瞬間、私の運命は決定していた。

「……はい。ニーナお嬢様のお望みのままに……」

くるりと背を向けて、背後にお尻を突き出す。臀部に添えた両手を左右に広げれば、一晩かけて解きほぐされた蜜壺を自ら差し出すような格好になった。香油の味を覚え込まされた末に微かな空気の動きでも察知できるほどに感度が高まってしまったその場所に、太くエラばった感触が押し当てられる。

「くっ……ぐ、ぅ……ぉオお……！」

今までにそこに触れてきたどんな物よりも太く、大きなモノが体の内側に入り込んでくる。肉を裂かれる鋭い痛みが脳を焼き、苦悶の声が喉から搾り出された。窮屈な膣肉を破り進める異物に対する忌避感に苦しむ意識の片隅で、密着した腰に手を添えたニーナの声が響き渡る。

「痛いでしょう……？　ごめんね、ノルンちゃん……。でも、ニーナ達二人がこうしないと意味が無いの。お互いの処女の血を吸ったこの魔道具を使って繋がった人達はね、未来永劫愛し合うようになるの。どんなに強固な心を持っていても、どんなに長く想っていた人が他にいたとしても、このディルドーが繋いだ愛の前では何もかもが無力なんだよ。だからこんな風に……」

――ずぷっ！

一撃。ほんの少しだけ後ろに引いた軟槍が突き込まれた瞬間、恐怖と苦痛に満ちた世界が裏返った。破瓜の余韻が嘘のように掻き消えて、痛みに寄っていた眉間が緩み、キツく結ばれていた口元が開く。一変した世界にフリーズした意識を呼び起こすかのように、再度引き絞られた二撃目が放たれた。

「……おごぉうっ！？」

突如として生まれた空白を埋めるように流し込まれた情報に、息を吸おうとしていた口から奇声が漏れる。脳天へと突き抜ける電流を処理した矢先、それではまだ足りないと言わんばかりに次々と同等のものが流し込まれる。

――パンッ　パンッ　パンッ　パンッ　パンッ！

「えっ、あ、おっ、ほっ、おっ、やっ、ぁ、ひぐ、ほぉっ……」

小気味よいリズムで打ちつけられるディルドーが、膣道ごと理性を切り崩していく。最奥に達する穂先が二十年の人生で積み上げられてきた価値観を切り崩し、イボだらけの柱が蠕動する度に抽送への嫌悪感が削ぎ落とされる。一突き毎に高まる快楽とニーナへの

愛情が、ノルン・フィーゼルという人間の心を上書きしていった。

「ひ、んぁっ……お……あれ……？　なんでぇ……？」

胎の奥底をノックされる未知の快楽の虜になっていた私の口から、自分でも信じられないくらいに悩ましげな声が漏れた。予感していた刺突の時は訪れず、腰をひいた動作そのままにディルドーを引き抜かれたことに抗議しようと振り向きかけた矢先、一転して荒々しい挿入に意識がトばされる。

「……ふほぉオオオオッッ！？！？」

瞬間、全身を駆け巡った熱感が体のあちこちで弾け、脳髄を焼く未知の快楽を祝うかのように開きっぱなしの口から艶かしい低音が奏でられた。

それまでのこちらを気遣うような抽送（ちゅうそう）ではない、肉欲に憑き動かされているだけのストローク。しかも次に狙いを定めたのは、しとどに蜜を溢れさせる膣穴（ちつあな）の上でヒクついていた尻穴だった。『出す』ために存在する穴を無理矢理拡張されれば破瓜とは別種の不快感を抱くことは間違いない筈なのに、真っ白に塗りつぶされた思考の中ではそれら全てがニーナへの愛情に変換されていく。



「……っ、ノルンちゃん！　ノルンちゃんっ！　きもちいい？　きもちいいよねっ？　ニーナもきもちいい！　とーってもしあわせなの！」

ぐぽっ、ぐぽっ、と生々しい吸着音と共に打ち付けられる腰の感触を尻肉で受け止める。後を引く吸着感から逃れることも出来ず、キツく締まった尻穴を掘削される背徳感。永遠の愛を誓った人の蕩けた声を聴きながら、際限なく注がれる愛を全身で享受（きょうじゅ）することができるという幸福。苦痛と官能（かんのう）が同時に訪れる唯一無二の時間を噛み締めながら、頭の片隅に残った最後の理性をまとめて削ぎ落とされる音が届いた気がした。

「へ……ぁ、おぉぉ……い、ぎ……ぁぁ……ッ」

涎まみれの顔を埋めたシーツを強く握り締め、半開きの口元から必死に酸素を取り込もうと喉を喘がせる。ただ息を吸って吐く、たったそれだけの行為でさえこの身体を熱く昂らせるきっかけにしかならなくて、官能に霞む脳裏から余計な思考がすり抜けていく。

「……えへへぇ……ノルンちゃん、すっかりエッチな顔になっちゃってる……。おまんこだけじゃなくってお尻の穴でもこんなに感じちゃうなんて、ノルンちゃんはスケベな奴隷さんなんだねぇ？」

火照りが治まらない背中に感じる温もりと柔らかさ。吹きかけられる吐息と共に耳朶を震わせる囁きが、麻痺した思考の隙間を縫うように染み込んでくる。肛門で繋がったまま背後から抱きすくめる腕が恥部に狙いを定め、手放しかけていた意識が無理やり引き上げられる。

「……お……おぉおぉおっ、ほォォォォおおおお……！？」

「ふふふ……おっぱいカリカリ～、おまんこクチュクチュクチュ～、お尻の穴もグリグリしちゃいまぁす～。どこが一番気持ちいいか、正直なノルンちゃんは答えられるかなぁ？」

「ひゃふうぅぅ……！？　……っ、は、はいっ！　ノルンは、ぜんぶっ……！　ぜんぶ……アハァっ、ぜんぶすき……ですぅ！！」

奴隷として飼われてから欠かさず行われてきた調教によって作り替えられた肉体が、浴びせかけられる快楽を賛美するかのように熱を帯びていく。かつての自分なら否定したであろう自身の状況も、『愛する人からの問いかけ』というフィルターが掛かった時点で誤魔化すという選択肢は存在しなかった。

「全部だなんて欲張りさんだねぇ。そんなに欲しいのならいくらでもあげちゃうから、エッチな奴隷のノルンちゃんの自己紹介をもっと聞きたいなぁ」

「……は、はいっ！　私はニーナお嬢様の『恋人』で、下された命令には絶対服従です！　体中のどこでも簡単にイッてしまえるほど敏感に改造された淫乱奴隷としてお嬢様の側に居られることが何よりの幸せなので、逃げ出そうなどとは考えません！」
「そうだよねぇ。ノルンちゃんはニーナと一緒にいられて幸せだよねぇ？」
「はい、ニーナお嬢様！　大好きです！　愛しています！　もう二度と離れません！　永遠の従属を、隷属を、愛を、この身この命に賭けて誓います！！」

すっかりいつもの口調に戻ったニーナの声が鼓膜を震わせ、再開されたピストンに急かされるように矢継ぎ早に言葉を紡ぐ。耳元で囁かれる声が、抱きしめた体から伝わる体温が、胎の奥深くまで貫くディルドーが形作る真っ白な快楽の大波。ノルン・フィーゼルという人間性を塗り潰すそれに攫われ、生まれた空白が彼女からの『愛』で満たされる。

「ありがとう。ニーナもだぁい好きだよぅ。……ねぇ、ノルンちゃん……今度はノルンちゃんからの愛もほしいなぁ……？」

脇の下を通した腕に抱き抱えられて体を起こし、頬を擦り合わせて至近距離からこちらを覗き込んでくる赤い瞳に射止められる。ゆっくりと引かれる腰によって引き起こされる擬似的な排泄快美に口元をふやけさせながら、恋人の『おねだり』を叶えるべくコクリと頷いた。

「ひぃっ！　はぁ、や、あふっ、お……おごおぉおぉぉ！？」
「はう、はっ、んっ……く……ぁ、う、あっ、はあっ……んひぁあっ！」

ぱちゅんっ、ぱちゅんっ、と肌同士を打ち合う音が響く。ピンク色の濃霧に覆われた視界の中で、高級なドレスを乱れさせた少女が水気を吸った黒髪をあちこちに広げながらベッドに横たわっていた。

こうして彼女を見下ろすのはこれまでの付き合いの中でも初めての事だったように思う。数分前まで私を犯していたニーナに馬乗りになり、天高く聳えるディルドーを飲み込んで腰を揺する。騎乗位、と呼ばれる体位を所望した彼女の指示通りに肌を重ね合わせてみたが、一度火が付いてしまった肉体はお互いの意志を置いてけぼりにする勢いで快楽を貪り合っていた。

開きっぱなしの唇を泡立たせて大きく見開いた目から涙を流すニーナの身体が規則的に上下に揺れ、股間から一直線に放たれる快楽電流を受け止めた私とニーナの喉が同時に嬌声を奏でる。繋がっている一点から求められる願望に手繰られるまま夢中になって下の唇同士が重なり合い、水っぽい接着音を響かせる。

腰を浮かせ、再び下ろす、その繰り返し。掘り進められたばかりの前後の穴は未だに熱い疼きを残しているけれど、その分張り型を咥え込むのにも幾らか余裕がある。しかし一

転して責められる側になったニーナにとってはこれが初めての経験で、しかもこちらが馬乗りになっている以上身を捩らせて快楽を誤魔化すこともできない。その結果、一度は主導権を握っていたはずの彼女は等しく快楽の虜となり、お互いの『愛』を求めて交わるだけの獣と化していった。

「――――は、っあ、や、い……ッ……んひぁあああァァァアア！！！」

「……あ……が、いっ……ぉ……ほぉぉおおおおおおおお！？！？」

重力に従って落ちた下半身の奥底、最も座りの良い場所にディルドーの先端が突き立てられた。途端に押し寄せる何倍もの火力に屈した肉体が反射的にその身を震わせ、そこから伝わる振動が下敷きになった主人の元へと届けられる。崩れ落ちるように身体を密着させて結合快楽に押し潰された私たちは、朦朧とする意識の中で互いの存在を確かめ合うように舌を絡め合わせ、『まだ足りない』という心の声に操られるようにイッたばかりの腰をグリグリと押し付け合うのだった。

エピローグ

窓の向こうから聞こえる鳥のさえずりが、暖かな布団にくるまっていた私の意識を呼び起こす。なんとなく重い瞼を開いて真っ先に目にしたのは、自分の腕の中で丸くなった黒髪の幼馴染……そして、『この世で最も愛する女性』の寝顔だった。

「……あぁ、そういえば昨日はあれからずっと楽しんじゃったんだっけ」

未だに疼きを残す前後の穴に手を添えながら瞳を閉じれば、その時の光景がありありと思い起こされる。お互いの体を穿り穿られ、ありとあらゆる場所を堪能して……どうやらそのまま眠ってしまったらしい。

改めて腕の中で寝息を立てる件の人物に目を向ける。あんなに必死で愛を求めてきて、最後には意識が混濁するほどに感じてくれた存在がこうしてあどけない寝顔を晒している。そのギャップがあまりにも可愛らしくて、衝動に駆られるまま口づけを落とす。昨日散々交わしたものとは違う、ただ肌に触れるだけのキス……それでも、その温もりを感じ取ったかのように眉を顰めた彼女はゆっくりと目を開いてきた。

「おはよう、ニーナちゃん。良い朝ね」

愛する人の名を呼んだだけなのに、心の内に火が灯ったような気がする。まだ覚醒しきっていない瞳に徐々に焦点が合い始め、紅の眼がこちらを捉えた瞬間、ぼんやりとしていた顔に柔らかな色が浮かび上がった。

「おはよぉ、ノルンちゃん。……えへへ、あったかくていい匂いだねぇ」

布団にくるまったままもぞもぞと身を寄せてきて、体温を確かめるように頬ずりしてくるニーナ。小動物めいた仕草で甘えてくる彼女の姿は、目覚めたばかりで半分も働いていない理性を切り崩すには十分すぎる破壊力だった。

「ねえ、ニーナちゃん？　朝食まではまだたっぷり時間があるよね？　だから……昨日の続き、しよ？」

湧き上がる情欲が抑えきれない私の提案に、ニーナは微かに目を丸くする。それでも次の瞬間には再び笑顔が戻っていて……そこには数秒前までにはない淫靡（いんび）な雰囲気が滲み出ていた。そのままどちらともなく身を寄せ合い、互いの愛を確かめ合うように熱い接吻（せっぷん）を交わすのだった。



























